

今月の視点

歴史と感染症

常任理事 長谷川 奈津江

WHOの公式発表では、世界最初の新型コロナウイルスの症例は2019年12月8日に発症したとされている。それから一年余り、世界はもちろん、日本も大きく変わった。昨年の春、マスコミ報道や人々の興味は、このウイルスの特質や感染症の症状についてであった。しかし、全国の新規感染者数、重症者数及び死亡者数が毎日更新される現在、私たちが必要としているのは、この感染症が引き起こす失業や生活苦、閉店や倒産等の経済的打撃、あるいは職種や年代におけるさまざまなギャップ、政府の対応や各国の貧富によるワクチン分配の不平等などの、この感染症の流行が社会へ与える影響に関する情報だ。どのような疾患も罹患者の社会環境と無関係ではないが、感染症の流行が社会に対する影響は極めて強い。文明は「感染症のゆりかご」だが、人類が定住と農耕を開始し、野生動物を家畜化することにより、麻疹(イヌ)・天然痘(ウシ)・百日咳(ブタ・イヌ)・インフルエンザ(水禽)がヒト社会に持ち込まれ、ヒトが密集する都市が感染症の流行に格好の土壌を提供してきた。

代表的な感染症の一つであるペストは、パンデミックを3回生じさせてきた。ペスト菌の祖先は中国に起源をもつ可能性が高く、その菌がシルクロードを通してユーラシア大陸西側に達した可能性があることを2010年の論文が報告している。記録に残る最初のペストの流行は、541年の東ローマ帝国で発生し、毎日1万人の死者が出たという。当時の皇帝も罹り、ガリアやイギ

リスへの遠征を断念したといわれる。地中海世界の人口の四分の一が死亡し、埋葬が間に合わなかったほどで、東ローマ帝国衰退のきっかけとなる。そして2回目となる有名な14世紀のヨーロッパでの大流行では、人口の3～5割が死亡し、多くの村が廃村となった。深刻な労働力不足により、農奴制が崩壊し、封建的身分制度は解体に向かった。また、ヴェネツィア共和国では、疾病の感染が疑われる船舶を40日間(イタリア語でquarantena)港外に強制的に停泊させる制度、検疫(英語でquarantine)が開始された。17世紀にニュートンが万有引力の基礎的概念を発見したのは、ロンドンのペスト流行で彼の大学が休校になり、故郷に帰ってのんびりしている期間だった。

19世紀に始まったコレラの流行の第6波により、インドでは一年間に80万人の死者が出たが、一方、イギリスにおいては公衆衛生が改善され、上下水道の整備が進むことになり、イギリス国民の健康状態は劇的に改善し平均寿命も大幅に伸びた。日本においては、11世紀初期の麻疹の流行が藤原摂関政治の終焉のきっかけになる。2003年のSARSで死者37人を出した台湾では、2004年に伝染病予防法を改め緊急時に行政部門を横断する対策本部を設置できるようにしたことが、現在の新型コロナウイルス感染の抑え込みに寄与している。

このように、人類の歴史は感染症との歴史でもある。現在のコロナ禍を語るとき、「未曾有の」「誰

もが経験したことのない」という枕詞をつけたくなるが、そうでもないようだ。

1918年からパンデミックを生じたインフルエンザは、第一次世界大戦下、中立国であったスペインが戦時の情報統制を敷いておらず感染情報を隠さず発表したため、スペイン風邪と不当なニックネームがついたのだが、世界では最低でも2,500万人以上の死者を出したといわれている。日本も大きな被害に遭った。内務省衛生局の報告によると、1918年8月から1920年の7月までの2年間に当時、人口約5,500万人の日本で2,350万人もの感染者を出した。病院には患者が押し寄せ、医者も看護婦も不足し需要の10分の1にも応じきれず、また、交通機関や通信機関も麻痺した。そして38万5,000人がインフルエンザないしは肺炎で死亡している。

西村秀一氏の翻訳による『史上最悪のインフルエンザ—忘れられたパンデミック』には、このパンデミックの記録が、世界情勢と流行拡大の関連のマクロ事象から一兵卒の病床まで詳細に記されている。100年前のこの時もマスクが問題となっていた。インフルエンザ流行中のサンフ



『史上最悪のインフルエンザ—忘れられたパンデミック』

ランシスコでは、マスク着用条例が発令されると、インフルエンザ患者、そしてジフテリア、麻疹、百日咳患者の報告数が急激に減少し、公衆衛生の専門家が見学に来るほどであった。しかし、市民の反発もあり、約1か月後にはマスク着用条例が解除となる。その後、インフルエンザ感染数が再度上昇し、再びマスク着用の呼びかけがなされるが、「人間の尊厳を犯す」という反マスク同盟も結成され、クリスマス商戦が台無しになると商業関係者の反対も強く、マスク推進中心者のオフィスに爆弾が送り付けられるほどであった。

アメリカの主要都市の中でも最悪な経験をしたのは、フィラデルフィアである。1918年当時、推定人口200万人であった東海岸のこの都市は、10月の1か月間で1万2,162人の市民がインフルエンザや肺炎で死亡した。これには感染による持病の悪化の死亡数は含まれていない。当時の生命保険会社の推定では、市民の死という形での同市の損失額は6,000万ドル以上。だが、後世の私たちから見ると理解しがたいのは、このような悲惨な状況でも戦意高揚のための巨大パレードがアメリカ全土で繰り広げられていたことだ。アメリカ国民は建国史上かつてない最悪のパンデミックのさなか、熱烈な国債購買運動により、かつてない多額の戦時国債を買い上げたのだ。戦争とインフルエンザ対策の両立を目指したのだろうか。

この100年前のパンデミックの大きな要因が第一次世界大戦であるのは言を俟たない。数十万人に上るアメリカ人がヨーロッパへ移動し、大戦末期の6か月間にはヨーロッパに渡った米軍兵士は150万人に上っていた。そのうちどれだけの兵士が亡くなったか今なお正確にはわからないが、大戦最後の2か月間で4,000人以上と推測されている。ある船団の記録では、船で運ばれた12万9,000人の兵士のうち、約2,000人が亡くなっている。洋上で死亡した兵士の遺体は本来、アメリカ本土に直接還されるはずだが、棺と遺体防腐処理が到底追いつかず、海葬され大西洋に流された。では、ワシントンにいる将軍や政治家たちは、この凄惨というしかない事態をどのように捉えていたのか。

アメリカ大統領ウィルソンが、インフルエンザの流行が収まるまでの期間、フランスへの兵士移動の一時中断について陸軍参謀総長に諮ると、その将軍の返事は、「いかなる理由があろうとも兵員の輸送は中断されるべきではありません。フランスに向かう途中でインフルエンザに倒れる兵士も、フランスの地で命を落とすものと同じくらい戦い、それぞれの役割をしっかりと果たしたことに変わりないのであります」というものであったとされている。アメリカ兵士のヨーロッパ渡航は継続され、多くの青年がUボートではなくインフルエンザウイルスにより大西洋に沈められた。

パンデミックの中、戦意高揚のため2万5,000人のパレードの先頭に立ったウィルソン大統領も、若い兵士を救いのない感染症への航海に送り出した将軍も、日本での戦勝祝いの提灯行列も、当時の社会状況や地位からの責任を果たしたものはあるが、歴史として顧みると、やはり他の選択肢がなかったのだからと考えてしまう。

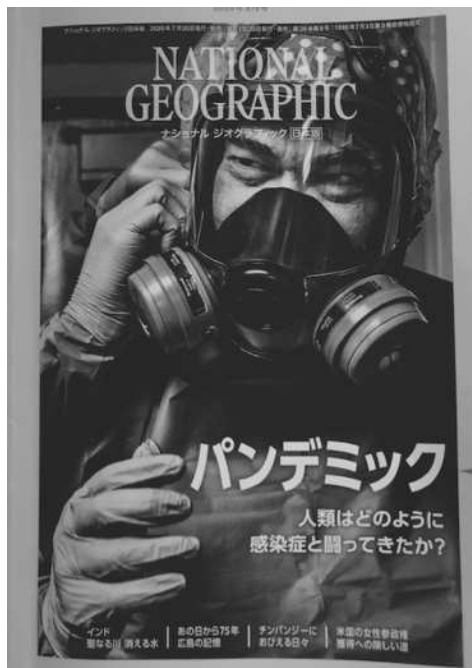
そのくせ、私自身は感染リスクを極端に怖れることもあれば、非正規雇用の女性の生活困窮の報道に接すると、経済を優先させるべきではと、さまざまな考えが錯綜する。

この100年間に医学は目覚ましい進歩を遂げ、現在の私たちの世界にはCDCもWHOも国立感染症研究所も存在している。しかし、このパンデミックという巨大な奔流の中では、ともすれば自分がしがみついている小さな波しか目に入らないという人間の在り様には古今東西変わりはない。この奔流に流されず社会の被害を最小にするた


め、どうするか。私たちは、特に社会のリーダーは、それを歴史に学ぶ必要がある。私たちは数多くのパンデミックを生き延びてきたヒトの子孫であるのだから。そして100年後の検証に耐える日本社会であってほしいと願う。

参考文献

『史上最悪のインフルエンザ
—忘れられたパンデミック』
アルフレッド・W・クロスビー（著）
西村秀一（訳・解説）
『感染症と文明—共生への道』 山本太郎
ナショナルジオグラフィック 2020年8月号




『ナショナル ジオグラフィック』



後継体制は万全ですか？

DtoDは後継者でお悩みの開業医を支援するシステムです。まずご相談ください。



お問い合わせ先

0120-337-613

受付時間 9:00~18:00(平日)

よい医療は、よい経営から

総合メディカル株式会社。

www.sogo-medical.co.jp 乗証一部(4775)

山口支店/山口市小郡高砂町1番8号 MY小郡ビル6階
TEL(083)974-0341 FAX(083)974-0342
本社/福岡市中央区天神
■国土交通大臣免許(2)第6343号 ■厚生労働大臣許可番号40-ユ-010064